



鮎川哲也 日影丈吉 土屋隆夫集

日本推理小説大系 13 東都書房

日本推理小説大系第13卷

鮎川哲也 日影文吉 土屋隆夫集  
定價三八〇円

著者 鮎川哲也 日影文吉 土屋隆夫

発行者 黒川義道

印刷所 豊国印刷株式会社

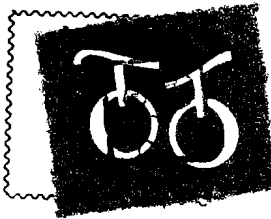
製本所 藤沢製本株式会社

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九  
電話 東京(九四一)三二一一

振替 東京 七二七三二一  
落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三五年一〇月一〇日第一刷



目次

鮎川哲也

黒いトランク 5

日影丈吉

内部の眞実 129

かむなぎうた 209

土屋隆夫

天国は遠すぎる 223

解説 江戸川乱歩 299





鮎川哲也



## 黒いトランク

## 一幕 あき

一

この事件の発端となった千九百四十九年十二月十日は、朝からどんよりとうす曇ってひどくうっとうしい日であった。だが後から考えてみると、この重くるしい天気こそ、事件の性格を端的に象徴していたように思われるのである。まことにこの事件は、地味で退屈な上にテンポがおそく、しかもその全貌が明らかとなるにつれ、首尾をつらぬく論理のきびしさがやりきれぬほどの重圧をともなつて、関係者をひとかたならず悩ませたのであった。

思うに犯人は、この犯罪をたくらむに一世一代の智慧をしばつたことであらう。犯人のその努力に対して、読者もまたこの記録を克明によむ努力を惜しまないならば、事件が合理的な解決をみるまでの経過を興味ぶかく理解できよう

し、また論理そのものを智的な遊戯としたのしむ人には、論理にはじまり論理におわるこの事件の記録こそ、久しい渴を十二分にいやすものであるといつてよいであらう。

さて事件の開幕は、その日の午後一時三分に、汐留駅前交番の電話のベルがけたたましく鳴ることによつて告げられた。

おりから立番中の大隅巡査は、すばやく受話器を耳にあてた。先方は汐留駅の若い職員で、彼の背後から職場のあらあらしい騒音やどなり声が手にとるようきこえ、それがこの駅員の話を受話器を通じて聞いていた。

受話器をかけたおえた大隅巡査は、腰のベルトをぎゅっとしめなおして同僚をかえりみだ。

「何うしたんだい？」

「なにね、駅の保管室からかかってきたんだが、妙な荷物がとどいてるっていうのさ」

「妙な荷物？……」

「うん、臭気がするんだつてよ、鼻もちのならない臭気が。……ちょっと行つてくるぜ」

彼はそういう残して交番をでた。

ここで汐留駅について簡単にふれておこう。

我々にとつてなつかしい思い出の歌である鉄道唱歌に、汽笛一声新橋を……とうたわれている新橋駅が、じつは今の汐留駅なのである。

旧新橋駅が開設されたのは明治五年十月、新橋・横浜間に鉄道が敷かれた時のことだから、

わが国でもっとも古い駅の一つといえる。この駅の歴史を語ることは、同時に明治文化史の側面を語ることになるほどに、当時の文明の中心的存在であつた。錦絵にもえがかれ、版画にもほられた。紅葉や蘆花たちの小説にもしばしば舞台となり、日清日露の戦役には、凱旋將軍がとくい氣にひげをひねりながら意気揚々としてフォームにおり立つた。

だがおごれる者久しからずのたとえは、新橋駅とても例外ではなかつたとみえ、やがて東京駅が竣工するとともに、いとも冷淡にその任をとかれることになつたのである。大正五年十二月、となりの烏森駅に新橋の名をゆずると同時に、おのれは汐留駅と改称されて、華やかな思い出をいだいたまま、あわれにも貨物専用の駅と成り果ててしまつたのである。

だが、成れの果てとはいへ、引込線の延長は十八軒余、貨物駅としては日本最大のものである。関西、四国、九州から東海道線を上つてくる貨車は千九百五十六年現在の一日平均が四百十三輛、それを汐留駅が一手にひきうけるとともに、一方では連日百七十四輛の貨車がでてゆく。そのかみの新橋ステーションの面影は今やどこをさがしても見出されなけれど、引込線にそつて立ちならぶ数々の倉庫や、巨大なクレーンが白い蒸気をはいて間断なく貨物の積みかえをしている姿をみると、虚飾をふるいおとしたあとの健康なうつくしさを感ずることができ。いま構内に足をふみ入れた大隅巡査は、



活気にあふれた貨物駅のいとなみに、圧倒されるような気がした。

「あ、ご苦労さまです。どうも様子が訝しいのですよ、どうぞこちらへ来て下さい」

人待ち顔で立っていた職員が、如才ない笑いをうかべて、大隅巡査に声をかけた。

「何か臭気がするというお話でしたかね？」

「はあ、動物のくさったような臭いです」

「動物のね？」

「はあ、猫の屍骸でも入っていたら飛んだお笑いくさですが、ことによると人間の屍体じゃあるまいかと思ひましてね」

「はあ、小口貨物なんです」

「引取人は？」

「それがですね、誰もこないのですよ」

トラックの間をぬうようにして歩きながら、そうした会話をかわしていくうちに、コンクリートの大きな倉庫について。これが保管物室である。くもった日の午後なのであたりはうす暗く、貨物置場の天井には数十個の電灯がかがやいていた。

忙し気な職員が、列車からはき出された貨物をはこび込んだり、整理したり、ノートにチェックしたりするのを、かたわらに立って監督していた年輩の主任が、大隅巡査の姿をみると陽やけのした顔を緊張させて、近づいてきた。

「どうもはつきりしないことでお呼び立てし

て、あとで笑われたり叱られたりするとこっちも立つ瀬がなくなりますが、あの荷物をあけるのに立会っていただきたいと思ひましてね」

指さした床の上に、黒っぽい大きな箱がよこたえられてある。近よってみると、大型の衣裳トランクであることが判った。かなり丈夫な牛皮ではられたものらしく、途中でちよつとやそつと乱暴に取扱われたぐらいでは、こわれるような代物とは思われない。幅のひろい革バンドが二本しめられて、装飾と実用の双方をかねた大きな真鍮の錠と錠前とが、にぶい光りをはなっている。むき出しのまま輸送されてきたものとみえ、ありふれたマニラ麻の細引がたてに二本よこに四本わたされたきりで、両端にかまほこ板より少し大きめの白木が一枚ずつくりつけられ、それにはぶつけたような文字であて名がしるされてあった。

東京都中央区日本橋蠣殻町五丁目四九

風雅堂

毛塚太左衛門様

更にその左側に、こまかい文字でしたためられた差出人の名は、つぎのように読めた。

赤松市外札島鳩生田

近松千鶴夫

それだけでは別に不審の念がおこるはずはな

い。だがそのトランクからは、鼻をおしつけるまでもなく、吐気をもよおすような異臭がするのである。

はさみを手にした主任に、大隅巡査は細引のむすび目をきらないように注意をし、主任は心得たと許り大きくうなずいて、なれた手つきで麻紐を切った。ついで二本の革バンドをぐいと力をいれてほどく。

「ああ君、机の上に万能鍵がおいである。持ってきてくれ」

一人の職員が命じられたものを持ってくると、主任はそれをそつと鍵穴にさしこんで、慎重な態度でひとねじりした。ボタン！と音をたてて錠がはずれる。つづいてもう一つ。それがすむと、二人の職員が両端にかがんで、トランクのふたに手をかけた。

「開けたまえ」

主任はのどにつまった声でいい、二人の青年は無言のままそろそろと開けはじめた。大隅巡査も主任も数名の職員たちも困睡をのみ、二寸三寸とあけられていくトランクを、まばたきもせず見まもっていた。悪臭は、ふたをあけるにしたがって、ますます激しくなる。一人の職員が仕事にかこつけて場をはずし、主任は耐えかねて麻のハンカチをとりだすと鼻をおさえた。

やがてふたはガククリと開いた。中には薰くずがぎっしり詰められている。二人の職員はおよび腰になって、その薬をとりのぞいていった。と、その下から黒緑色のゴムシートにくる

た。

まれた大きな包みがあらわれたのである。駅員の一人が胃のあたりをおさえて、横とびに表てへでていく。二人の青年は鼻がもぎれるような異臭をぐつとこらえ、ゴムシートをひろげた。と同時に、人々はいっせいにわッと叫んだのであった。ゴムシートの中からは、羊羹色にさめた羽織袴をつけたさんざり頭のむさくるしい髷を生やした男が、ぶざまな恰好でころがり出たのだ。

死んでから相当の時日がたっているらしく、顔一面がみくくはれあがって、ごみ溜にすてられた洋梨のように気味わるい色をしている。大隅巡査はさすがに誰より早くおちつきをとりもどし、主任に現場維持を命じると共に、手近かの電話をかりて急を報じたのであった。

## 二

こうして第一幕がおわった十分のちには、所轄愛宕署から銀原警部を先頭に五人の係官と技師及び警察医がかけつけ、それをきっかけに静的な場面は一転して動的な第二場に突入したのだった。一行のあとから警視庁づめの記者が一団となつてのりつける。カメラをすえフラッシュがたかれる。鑑識係りがトランクにアルミ粉をふきつける頃、銀原警部は主任をわきによんで、訊取りをはじめていた。彼はまだシロツクからたちなおれぬらしく、時おりピクピクと頬をけいれんさせ、しきりにまばたきをしていった。

「このトランクの受取人はまだ来ないのですね？」

「ええ、今日で三日目になるのに、まだ来ないのですよ。それで今朝電話をかけてみようと思ひましてね、電話帳をひろげてみたくんですが、名前がのつてないのです。そこでこちらの警察にたずねてみたところ、四十九番地はおろか町内には風雅堂という店もないし、毛塚左衛門という人物も住んでいないとの返事なのです。だいいち五丁目がないんですよ」

「ふうむ」

と警部はあごをつまんだ。屍体を器物につめて出鱈目の宛名で発送するのは、しばしば推理小説の題材にも扱われているように、決してめずらしい事件ではない。昨年のはじめにも上野駅で行李づめの女の屍体が発見されたし、その前年には新宿駅でも同様なことがあった。近松千鶴夫というのが発送した人物の本名であるとは思われないが、架空の名前であるとしても、一応はそれを調べてみる必要がある。

「送り出した駅と連絡をとってみたいのですがね、一体どこから積まれてきたのですか」

主任は机上の本立てから黒い表紙の紙ばさみをひきぬいた。

「ちょっと待って下さいよ。ええと……、福岡県の筑豊本線に札島という駅がありまして、そこから出されております。受付けたのは今月の四日ですな」

「ふうむ、福岡県か。今月の四日と……、今日

は十日だから……」

銀原警部は鉛筆のさきをしきりとなめながら、ぶつぶつと独りごとをいっていた。

「ちょっとその札島駅と通話してみたいのですが、簡単につながりますか」

「ええ、鉄道電話は早いものですよ。四五分ですんでしょう」

「それじゃすみませんが、向うを呼びだしてもらいましょうか」

主任が札島駅の呼出しを依頼して受話器をかけた時、警部は背中をまるめて、壁にはられた鉄道地図をのぞきこんでいた。

「どれですかね、筑豊本線というのは？」

主任は電話のそばをはなれて、壁ぎわに近づいた。

「これが石炭積出しで知られた赤松港です。ここを起点として鹿児島本線の折尾駅とクロスし、さらに筑豊炭田一帯をぶちぬいて、ふたたび鹿児島本線の原田駅で終点となる線ですよ。赤松と折尾の間には藤ノ木と札島の二つの駅があって、札島というのは折尾寄りのほうです」

(一二五頁の地図④参照)  
警部は二三度うなずいて、くるりと主任のほうを向いた。

「ああ、そういえば赤松というのは、作家の火野葦平がいたところじゃないですかね。何だか彼の作品によくでてくるように覚えていますが……」

「そうです、私も思い出しました。あの辺の沖

仲仕や博徒を主題にした短篇をよんだことがありませんよ」

ほんの三十秒ほど、主任は陰惨なトランクの問題をわすれることができたが、銀原警部はただちに彼を現実の世界へひきもどしてしまつた。

「では電話がかかってくる間を利用して、少々お答えしていただきますよ。このトランクが到着したのは何日のことですか」

「ちょっと待って下さいよ」

主任はたくましい腕をのびして、ふたたび先刻の紙ばさみを取りあげ、指をなめて小口貨物通知書をとった。

「到着は七日の正午頃でした」

「七日というところ、一昨日ですね。その時は異状をみとめなかつたのですか」

「ええ、一向に気づきませんでしたね。ただ引取人が来ないのと、今朝になって宛名も宛先も出鱈目だということが判つてから、訝しいぞと感じたのですよ。ところが、先刻迷いこんだのら犬がひどく吠えだてるものですから、鼻をおしつけてみると思臭がひどい。それでいよいよ尋常ではないということになつたわけです」

「札幌駅で受付けたのは四日でしたね。内容品は何と記入されてありますか。まさか屍体とは書かれてないでしょう」

「ええ、古美術品としてあります」「ほほう、古美術品ですか……」

このぶよぶよと半ばくされかかつた屍体と古美術品の対比の妙が、銀原警部を思わずうならせた。

「そうです、重量七十一斤、發送人近松千鶴夫ということになつてます」

主任がそういつた時、電話のベルがなつた。主任はすばやく受話器をとり上げてふたことみこと応答し、送話器の口をおさえると上目づかいに警部をみた。

「向うの駅長がでとります。それに、トランクを受付けた職員もいるそうですが……」

「ああ、代らせて下さい」

受話器をうけた警部は職名をのべ、あのトランクに不審の点があるからとだけいって、屍体のことにはふれなかつた。駅長は、当時自分分はタッチしなかつたから何も知らぬといひ、すぐに若い職員とかわつた。

(あ、もしもし、いま駅長さんの話をきいていたと思ひますけど、十二月四日にこちらの汐留駅あてで、黒い牛の革でできた大型トランクが送られたはずなんですがね。そうそう、古美術品が入っているやつです。あのトランクを受付けた当時の話をきかせてくれませんか)

(はあ、よかです。あのトランクはですナ、十二月四日の晩、私が扱つたとです)

(何時でしたかね?)

(時間はですナ、十八時三十分頃です。それで同僚の手をかりて、終発の貨車につんだのです

たい)

(發送したのはどんな人でしたかね?)

(あれはですナ、鳩生田の近松さんちゆう人です)

(で、あなたはその近松さんという人をよく知つているのですか)

(あのですナ、電話が遠くてちよつときこえませんが……)

(あのね、近松さんを知つてますか)

(はあ、べつに親しい人じゃなかパツテ、顔はよく知つとります)

(近松さんは美術品をあつかう人ですか)

(さあ……)

(職業はなんですか)

(何つて……別に……、あの人は引揚者ですた)

(それじゃ、無職ですね?)

(そうですナ、まあブローカーか闇屋でもやつとるのでしょうな)

銀原警部はもう少しぐりたかつたが、近松に警戒心をおこさせてはまずいと考え、あとは札幌を管轄する警察にまかせることとした。そこで相手にいまの話を取長以外の誰にもしやべらぬよう注意をして、電話をきつた。

近松という男がブローカー同志のごたごたで仲間を殺し、その屍体をトランク詰めにして汐留駅に送つてよこした。しごく簡単に判りきつた事件である。堂々と本人が送りだしていたこ

とは、意外というよりもむしろ間がぬけていて、いささか拍子ぬけがする。形式的に解剖をすませたらば、一応の報告書を先方へ送って、事件を移譲するだけだ。警部はシガレットケースをとりだすと、主任にすすめて自分も一本くわえた。

一方指紋の検出もその頃は一段落ついて、トランクは警察医の指揮のもとに、警官たちにかえられて警察自動車にのせられ、信濃町の慶大法医学教室へはこぼれていった。そのあとで銀原警部は、新聞記者にむかって事件の内容をかいつまんで発表した。彼等にしても、おりからの記事枯れをうるおすという意味のほかには大して興味もない顔つきで、ただ機械的に筆をうごかしているにすぎなかった。これが後日担当者を疲労困憊させる難事件になろうとは、誰一人として考えるものはなかったのである。

### 三

一件はただちに福岡県の赤松署へうつされ、問題の衣裳トランクと解剖の詳細な報告も、その日の夜おそく発送された。ちなみに、当夜警察電話で通報された屍体検案の内容はつぎのようなものである。

一、身許不詳男子の屍体検案  
氏名年齢共に不詳なるも、四〇歳前後と推定される。身長一五六糎、体重五一斤。死亡推

定時日は略々一〇日前、即ち一月二八日から一月一日にかけての事と思われる。致命傷は頭部の打撲傷。木刀様の鈍器で一撃されたるものらしく、左の顱頂骨を中心とした長さ五糎幅三糎の骨折が認められ、言う迄もなく即死である。従って之を過失死若くは他殺と断定する。なおその他に被検案者をして死に到らしめたと思定されるが如き何等の痕跡をも発見しない。

別に胃中より摂取後略々三時間を経過せるものと思われる多量の白隠元と米、少量の昆布、牛肉、魚肉、人参、大根、牛蒡、鶏卵、奈良漬、紅生姜等が発見された。更に同人の外耳から微量の石炭殻が見出された事を付言する。

### 二、其の他

被検案者の所持品は凡て注意深く引抜かれてあるが、屍体の下から左の二品が発見された。

(一) 筑後柳河駅発売、折尾行の使用済三等片道乗車券一枚。発売日付は二四・一一・二八となつてゐる。

(二) 縁近眼鏡一個。右眼のレンズがわれ、破片がトランクの底に散らばつてゐる。

但し右が被検案者の物であるか否かは言明の限りではない。

## 二 逃 亡

### 一

福岡県の赤松警察署では、この事件の通牒をうけて、大しておどろきもしなかった。というのは、近松が麻薬の密売者としてかねてから当局の監視下にあつたので、仲間のいざこざがこうした結果になつたものと、一応の判断をくだしたからである。

大体が赤松市は石炭積出しの人足と仲仕の多いところだから、これまであつた犯罪の大部分は彼等のきつたはつたの刃傷沙汰で、その動機にしても、女に関する怨恨が酒のちからで爆発するという単純なものだけに、ある意味では底のあさい陽性な事件が犯罪統計のほとんどを占めていた。したがって、相手の屍体をトランクに詰めて送り返したこの事件は、他の都会では決して珍しくないありふれた出来事かもしれないが、赤松署にとっては外科専門の医者のもとに精神病者がつれこまれたようなものであり、署長もおどろくことこそしなかつたけれど、些かとまどいを感じたのは事実である。

それはとも角、ぐずぐずしていると相手を逃亡させるおそれがある。東京から通牒があるやただちに地検に逮捕状を請求し、それがでるのを待たずに参考人の名目で連行させようとし

て、先ほど二名の刑事をさしむけたところであつた。

北京からの引揚者である近松千鶴夫は、赤松市外の札幌鳩生田にすんでいる。おもてむきは無職といふことになつてゐるが、福岡県人でもない彼がそのような場所に住居をかまえたのは、麻栗の密輸入ならびに密売に関係あるものと、当局はにらんでゐた。彼が扱うのはモルヒネと塩酸ヘロインが主で、それらは暗夜にまぎれ、自宅の前を流れる運河をつうじて陸あげされてゐる様子だつた。近松のモルヒネは一リツトル二十万円でながされるので普通の相場より一割やすく、取引はなかなか活潑におこなわれた模様であつた。

ところが一年ほど前から彼のほうでも当局の内偵をざとつたらしく、表面上は足をあらつたように見せかけ、鳴かずとばずの状態がつづいたため、赤松署の調査もはかばかしくなくて、持久戦に入つてゐたところであつた。

「署長、遠慮のないとこをいいますと、近松はもう逃亡してゐるのじゃないかと思ひますね」

タバコのすいがらを灰皿におしつけながら、梅田警部補がはきはきした口調でいつた。ある歌舞伎の若手俳優に似た美男子だから、こうした地方の警察にくすぶつてゐるのは勿体ないやうな青年である。おりから上官が病氣欠勤をしてゐるので、この事件は彼の主任で調査することになつてゐたが、それは警部補にとって初陣でもあつた。

ふとつた署長は小さなはさみで手のつめをきつてゐたが、その顔をあげもせず、何故かね、といつた。

「なぜつて、屍体をトランクづめにして送つただけでは、そのうちに発覚することは明かぢやないですか。まして荷札に自分の名を記入するなんて、初めからこうなることを計算にいれてゐたに違ひありませんよ。とすると彼が意図したのは、今月の四日に札幌駅から発送して、それが発覚するまでの間の時日をかせぐわけぢやないでしょうか。そうとすれば、今日までの貴重な数日間をボヤボヤしてゐるはずもないですよ」

梅田の予想はみごとに當つて、その数分のちに帰つてきた刑事たちは、近松がすでに逃亡してゐることを報告した。

「我々もこまかい点はまだ訊いたらんのですがね、とりあえず妻女を同行してきました。それからこれが近松の写真です。なかなか男っぷりがよかです」

刑事の一人がポケットからプロニーの写真をとりに出した。

「何がよか男か。こすつたくれごたる面しとる」

署長が吐きすてるやうにいつて、梅田に手わたした。一見三十七八歳の、いかにも美男子を自覚したやうな顔つきの男が、長くもないあごをちよいとつまんでポーズをとつたところに、映画俳優にでもありやうなきざつぽさが見え

る。その上、レンズに向けてにんまり笑つた腫が、署長のいうとおり氣をゆるせない狡猾そうな印象を与えるのだった。

梅田は焼増しをたのんで廊下に出た。

## 二

応接室のドアをあけても、近松の妻女はふりむきもせず、逆光線にプロフィールの輪郭をくつきりと強調して、窓の外をみつめてゐる。グリーンのたじまのお召しに献上博多のおびをしめ、羽織もおなじお召しの黒い井桁がすり。密輸入者の妻とは思えぬ氣品があつた。

「近松千鶴夫氏の夫人でいらつしゃいますね？」

彼の口調は丁重である。

「はい」

「実はご主人にある容疑がかりましてね、事をはつきりさせるために、少々おたずねしたいと思ひます」

「どうぞ」

と相手は口数がすくない。

ととのつた目鼻だちの卵がたの顔にうすく化粧をはき、ゆるく波をうった黒髪がえりのあたりで大きくまきかえつて、つつましやかな魅惑にあふれてゐる。わかい頃にはスポーツできたえたのだらうか、牝鹿のやうにすんなりとした体つきである。三十を越えたか越えぬか、人妻としていまが美しいさかりのはずだ、全く、密輸入者の妻にしておくのはもつたない。幸福

な環境において、こぼれるばかりに微笑ませてみたいと思う。

梅田警部補は雑念をふりすてて、咳ばらいをした。

「ご主人がいま何処においでになるか、ご存知ではありませんか」

「いいえ」

「では、ご主人と最後に別れたのはいつでしょう？」

「今月の四日ですね」

四日というのは、近松が大型トランクを発送したその日である。梅田の神経は一瞬ピンと緊張した。

「質問が重複するかもしれませんが、それ以来、お逢いにならないですね？」

「はい」

「四日のいつ頃お別れになったのですか」

「夕食後ですから、五時頃だと思います」

札鳥駅でトランクを発送したのは午後六時半だから、彼は夕食をすませると家をでて駅にたちより、トランクを送り出して失踪したことになる。

「出ていかれた時の服装についてうかがいます。洋服ですか」

「はい」

「背広ですね？」

「はい」

「色や服地について、くわしくおきかせ下さい」

というふうの一つ一つたずねた結果、近松が失踪当時の服装は、うすみどりのギヤバジンの上下に茶色ウール地のシングルのオーバー、それに黒緑色のキッドの手袋をはめていることが判った。

「マフラーはどうでした？」

「灰がかった弁慶じまで、地はやはりウールです」

「所持品は？」

「白麻のポストンバッグ一つでした」

「それきりですか。他に何も持って出ませんでしたか」

「はい」

「その時、どこへ行くといわれましたか？」

「何とも申しません」

「だまったまま出られたのですか」

「はい」

「それは少々おかしいですね。ポストンバッグまでさげたら、何処かへ旅行される恰好だと思えますが……」

いままですラストラと答えてきた相手は、この時になってはじめて渋滞をみせた。夫の行方をかくそうとしているのに違いない。

「ご主人に何もおたずねにならなかったのですか」

「ええ」

どちらかといえは無愛想な、木で鼻をくくったようなひびきがある。

「ほう、ご主人が旅行されるというのに、行先

もたずねなかったのですか。いさかいでもなさったんですかね？」

そういつてしまつてから、まずいことを訊いたものだと思つたが、果して彼女はツンとどがった鼻の先を天井にむけて、返事がない。

「失敬しました。近松氏が出發される時、ポストンバッグの他に、大きな黒い衣裳トランクを持って出やしませんでしたか」

だしぬけにトランクの話もちだされて、彼女

はさも納得がゆきかねる表情である。

「いいえ」

「大きいからすぐ目につくはずですが」

「いいえとお答えしましたわ」

「なかなか豪華な品ですけど、あなたの持物でしょうか」

「いいえ、あたくしのは外地において参りましたわ」

「すると引揚げられてからお求めになったのですね？」

梅田はあくまで喰いさがった。「いいえ、ご質問の意味が判りかねますけど。……とに角あたくし、衣裳トランクはもっておりません」

「ほう、するとあれはあなたのものではなくて、近松氏の所有とみえますな」

「存じません」

「失礼ですが、同じ家にすんでいらっしゃるご夫婦でいて、ご主人のなさることに無関心でお

いでになる理由がのみこめませんが……」

「……………」  
 相手は返事をするかわりに、正面きつて警部補の顔をきつと見た。

「あたくし、あなたがそのようなことをお訊ねになる権利はないと思いますわ」

「そこでですよ奥さん、問題は。私の訊きかたがまずかったかも知れませんが、権利とか義務とかいうことになしに、犯罪事件の解決をはかるためにご協力をおねがいしたいのです」

「近松のどんな容疑ですの？ それを初めに仰言っていただきたいと存じますわ」

「そういわれると一言もありません。それではお話しすけど、ご主人が今月の四日に、札幌駅から今申した大型トランクを、内容が古美術品だと称して送りだしたのです。ところが中をあけてみると、それが古美術品ではなくて、腐敗しかかった男の屍体だったんです」

「まあ、屍体！ では……では近松は殺人容疑ですのね？」

彼女は明かにおどろいたらしく、顔からさつと血の色がひくと、右手の指をそつとまぶたに当てて大きく息をすった。

「そうです、奥さん。おや、どうなさいますか？」

失神するかヒステリーでもおこすのではあるまいかと、若い警部補はおもわず腰をうかした。

「もう大丈夫ですわ、……もう大丈夫」  
 「まだ顔色があおいですね。気分がわるかったらうち切るとして、もう少し訊問させて下さい。そういつたわけで、私どもはあの大型トランクに注目しております。ご主人があれをいつ何処で求められたか、ご存知ありませんか」

「本当にあたくし何も存じませんのよ」  
 彼女はほつとふとい吐息をし、梅田もさぞわれたように嘆息した。

「それでは被害者についておききますけど、年の頃四十歳ぐらいで、あまり風采のぱつとしない五尺一二寸の男をご存知ないですか。髪の毛をざんぎりにして、鉄ぶちの近眼鏡をかけています。どちらかという醜男のようですが……」

警視庁からとどいた報告をそらんじてみせると、相手は無表情のまま首をよこにふった。

「いいえ、存じません」  
 「ご主人と利害関係にある男じゃないかと考えているのですが……」

「……思いあたりませんわ」  
 「風雅堂の毛塚太左衛門という人は？」

「全然存じません」  
 「では質問をかえますがね、ご主人が発された時の所持品と所持金はどうでしょう？」

「わかりませんわ。お金も身の廻り品も、一切あたくしの手を触れさせませんもの」

梅田は少しいらだててきた。この訊問で得るところは、まだ一つもないのである。

「少しつっこんだ質問になりますよ。近松氏が被害者を自宅で殺した場合、あるいはトランク

に屍体をつめた場合ですわね、あなたは現場を目撃されないとしても、そこに種々の痕跡のこるはずですが、気づかれませんでしたか。……血痕だとか薬くずだとか」

「薬くず？ ……」  
 「ええ、屍体がごろごろしないように、薬くずをつめこんであったのですよ」

相手は神経質そうに眉をひそめ、身ぶるいをした。

「いいえ、何も気づきませんでしたわ」  
 「べつにあなたを疑っているわけではありませんが、お怒りにならないでいただきたいのです。ご主人がああしたトランクを持っていらしたら、あなたのお目にとまらぬはずはないと思うのですがね」

「そのご質問は結局あたくしを疑ぐっていらっしゃるのじゃありません？ 見ませんとお答えしたら見ないのですわ。でも、近松があたくしに隠そうとすれば、いくらでも隠すことはできますの」

「それはどういわけですか」  
 彼女はその白くほそい指で、テーブルの上に鋭角三角形をえがいた。

「あたくしの家の裏手の通りに、がけがあります。そのがけに戦時中ほった横穴式の防空壕があるんです。防空壕まで直線距離にしますと五六十メートルぐらいですけど、道路ぞいに行くと百五十メートルほどあります。ちょうど三角形の二辺をいくようなわけになりますの。近

松はその防空壕にとびらをつけて物置として使っていましたから、お話のトランクにしてもその中に隠しておけば、あたくしが気づくはずはございません」

防空壕の調査はあとで刑事にやらせることにして、警部補は訊問をうちきった。

「どうも不快な思いをおかけして、すみませんでした。今日はこれでお引取り下さい。ひょっとするとまたおいでを願うかもしれませんから、当分札島をはなれないようにしていただきます」

近松夫人はそれをきいてほっとしたように立上った。

### 三

「私は札島駅にいつてきます。その間に近松が使っていた物置の調査をねがいます。それから各交通機関に連絡をとって、四日夜から五日にかけて近松を見たものはいないか、その点をしらべさせて下さい」

署長にそれだけいい残して、梅田は署のポーチに立った。空をおおぐと雲がひくい。ふるとすれば雪になるだろうか。彼は下宿をでる時にかさを持たなかったことをくやみながら、バスの停留所へ向った。

ひけ時を廻っているせいかな、バスの乗客は少なかった。ガタガタとはずむ車台が、梅田の空虚な胃袋をようしゃなくゆすぶる。彼は足をふんばりぐっと眼をとじて、この中世紀的な拷問に

たえようとした。

札島でございませうとバスガールにいわれて、あわてて車をおりる。そのまま真直に走りさる赤いテールライトを横目にみて、左に曲ってくらい切通しを百五十メートルほど歩くと、行手が急に大きくひらけて、その広場のどんづまりにあるのが札島駅だった。筑豊本線とはいうものの支線ほどの乗客もなく、日がくれたばかりというのに、まるで深夜の駅のようにひっそりとしていた。

駅員のいない改札口をまたいでフォームにて、駅長室のドアをたたく。駅長はちょうど帰り仕度をしていたところだったが、梅田警部補をみるとオーパーをぬいで、事務机に請じた。すでに東京における事件発生のあらましを知っているためか、梅田の来訪した目的をきくと、すぐに一人の駅員をよんでくれた。大沼君というその駅員は銀ぶちの眼鏡をかけた、ひどく地味な青年である。

「これはまだ発表されていないことですから、そのつもりで書いて下さい。じつは近松氏が送したトランクの中には、男の屍骸が入っていたのです。私どもとしても、ただちに近松氏が犯人だとは考えていませんが、事件の鍵をにぎっていることは間違いない。そこでこのトランクについて近松氏の動きを知りたいと思つて、お邪魔したわけなのです。まずあなたがあのトランクを受取った時のことからおききしましょう。あれは何日の何時頃だったでしょうか

ね、その点からどうぞ」

駅長も駅員もトランクの内容が屍体であったのは想像外だったらしく、虚をつかれた面持でしばらくだまつていたが、やがて大沼君がボツリとこたえた。

「今日四日の、十八時三十分頃ですたい」

「その時の近松氏の服装だとか態度だとか、そういうことで覚えてる点を話して下さい」

「さあ、あまり印象にのこつたらんですナ。洋服にオーパーをきとることは覚えとりませんが」

「態度はどうでした？ なにか興奮していたとか、ビクビクしていた様子はなかったですか」

「さあ、そういうえば、少々緊張しとつたかもしれんですナ。それとも重たかトランクをかかえてきたので、息切れしとつたのかもしれんです」

「それでは、あのトランクを受付けて発送するまでの話をきかせてくれませんか」

と警部補は矛先をかえた。

「はあ、その時近松さんは、『小口貨物で東京の汐留駅まで送りたいのだが』といわれますので、すぐに重量をはかって手続きをとりました。それから通知書を書いてわたしました。それだけですたい」

「トランクの重量はどのくらいありましたかね？」

梅田は、すべてを自分でたしかめないと気がすまなかつた。すると相手は腕をのぼして帳簿をとり、指先をなめてページをくつた。



「七十一疋ですナ」

「内容は古美術品だといったのですね？」

「そうですナ」

彼がそうこたえたとき、子供のようになら入ってきた。かい青年がバンドをゆるめながら入ってきた。食事をすませたばかりとみえ、まだ口のあたりをもぐもぐさせている。

「これが一時預り所の係りで、貝津君と申しませう。実はあのトランクのことで、お耳にいれておいたほうがよくはないかと考えたものですかね」

と駅長はなにやら意味あり気なことをいって。

「何ですか」

「はあ、近松さんはあのトランクを、私のところに一時預けておったのです」

「それがあなた、十二月の一日からなのですよ」

と駅長は説明の要を感じた。

「ほほう、一日から？……」

「ええ、最初から話すと、こぎやんで下さい。

一日の夜の八時頃に、近松さんがあのトランクをリヤカーにのせてはこんできました。『これを一時預けたいのだが、手伝ってくれないか』というので手をかして降ろしますと、意外に重いのです。駅の規則では三十疋以上のものは保管できないことになってますから、近松さんにそれを話しました。すると、『何疋あるのか計ってみよう』というもんですから、台秤に

のせてみると七十疋をこえています。そこで私が『やけに重たかもンですナ』といいますと、『骨董品さ。二日ばかりしたら小口貨物で送りだしたいのだ』と返事しました。そして『重量がどのくらいのとしみあったれたこといわなくてもいいじゃないか、また家へもって帰るのも大変だしさ』と笑いながらいうのです。私も役目の上から一応はそのようにことわりしましたが、杓子定規に規則をふりまわすのもどうかと思いましたが、いなかの駅はその点ルーズですから、こころよく預ったわけです。その時あの人、

「ひよっとすると三日ばかり預けておくかもしれないが、料金はどうなってるのかね？」とききますので、五日目までは一個につき一日五円だと教えてあげたのです」

「ほほう」

「するとそれから三日目の夜、つまり今月の四日の晩ですが、六時半頃やってきて、トランクを出してくれといいました。そこで出してあげると、今度は貨物の窓口へ持っていったわけですよ」

「あなたはどう思いましたか、その近松氏がトランクを預けに来た夜と受出しに来た夜とに、そわそわするとかビクビクするとか、平生とちがった態度に気づきませんでしたか」

「一日の夜は冗談をいっていたくらいですけど、別に変わったところもなかったですが、四日の晩は少々おかしかったですナ」

「さあ、そうきかるとちょっと困るですが、私がトランクをわたす時に、妙にせかせかせした表情をしりました。出ていく時に私がさよならと声をかけたのに、返事もしなかったくらいです」

「なる程ね。ところでそのトランクを預っている間、あるいは渡してやった時に、変わったことはなかったですか」

「変わったこと？……」

「つまりですナ、屍体の臭気がするとかいうような……」

「さあ、気づかなかったですナ」

「一日の夜に運んできた時のトランクの荷造りはどうなっていました？」

「そうですナ、むき出しのトランクにマニラ麻の紐がたてに二本よこに四本かかっている、両端に木の荷札がつけてあったきりです。小口貨物にするには、必ず両端に一枚ずつ札をつけるきまりになつてゐるのです」

「するとこういうことになるわけですね。近松氏が七十疋のトランクを十二月一日の午後八時頃にもちこんで、古美術品が入っているといつて一時預けした。そして改めて四日の夜六時半頃やってきて、それを受出すと、今度は貨物受付の窓口へもって行って、小口扱いで発送した……」

「そうですナ」

と二人の青年職員は同時に肯定した。このトランクに大きな謎がひそんでいようとは、当時